

氏名（本籍）	俵山 雄司				
学位の種類	博士（言語学）				
学位記番号	博 乙 第 2731 号				
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日				
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当				
審査研究科	人文社会科学研究科				
学位論文題目	日本語の談話終結表現の研究				
主査	筑波大学 教授	博士（言語学）	砂川有里子		
副査	筑波大学 教授	博士（言語学）	杉本 武		
副査	筑波大学 教授	博士（言語学）	沼田 善子		
副査	筑波大学 准教授		木戸 光子		

論文の要旨

本論文は、現代日本語における談話終結表現について、テキスト言語学・談話分析の立場から考察することを目的とする。

本論文の章立ては以下の通りである。

- 第1章 序論
- 第2章 本研究の分析に用いる概念
- 第3章 談話終結と接続表現
- 第4章 談話終結と文末表現
- 第5章 談話終結と文のタイプ
- 第6章 話し言葉における談話終結
- 第7章 結論

第1章では、本論文の目的、研究の対象と方法、および本論文の構成が述べられる。

第2章では、先行研究で提起された4つの概念「物語の構造」「統括」「結束性」「起こし文型」を解説し、それらと本論文との関連について検討した上で、本論文で扱う「談話終結部」「談話終結表現」「終結性」という概念が提示される。

第3章では、「こうして」「このように」「結局」という接続詞的な表現を取り上げ、類似の意味を持つ接続詞・副詞などと比較しながらその意味と用法、および、談話展開上の機能の記述が行われる。また、それぞれの意味と用法と談話展開上の機能が談話終結を支える「終結性」のどのような側面と関連するかが検討され、「結束性」の下位項目として以下の概念が提起される。

統合：先行文群で表現されている事柄や、それに伴って形成される先行文脈をまとめ上げ、次の叙述へと繋げる働き

収束：談話中に述べられている一連の出来事の帰結を示したり、談話中で提起された課題の解答を示したりすることで、叙述や議論が最終地点に到着したことをあらわす働き

解釈：談話中に述べられている一連の出来事や一連の解説に対して、別の観点から見た場合の意義を表現する働き

その上で、「こうして」「このように」「結局」という形式が先行文群を「統合」する性質と、談話中の一連の出来事の「収束」、もしくは談話中の複数の事項や指向に対する「解釈」という性質を併せ持つことが述べられる。

第4章では、思考動詞、各種のモダリティ形式、「わけだ」「のだ」を取り上げ、それらの意味・用法上の特徴と談話終結との関係が検討され、「終結性」の下位項目として以下の概念が提起される。

語り手の存在の暗示：談話の展開上、叙述や議論の進行に焦点が当たっている局面でその叙述や議論がある特定の語り手によって生み出されている事実をほのめかす働き

その上で、思考動詞、各種のモダリティ形式、「わけだ」「のだ」の全てに「語り手の存在の暗示」が実現されること、それに加えて「わけだ」は「解釈」、「のだ」は「収束」も同時に有していることが指摘される。また、「のだ」文については、実験的な手法での調査を行い、「のだ」文が必ずしも区切り目を感じさせるとは限らないことや、区切り目の認識をもたらしやすいのは「のだ」文が先行文脈で提示された疑問の回答と解釈される場合であることが示される。さらに、「のだ」文と「からだ」文との比較により「のだ」文がテキストをグローバルに組織化し、複数の文を様々な大きさのユニットにまとめ上げる力を持つことが主張される。

第5章では、「談話終結部において、一定のタイプの文が選ばれやすい」という仮説をもとに、時事的な談話を扱った論説文の末尾の文について、形態的な観点からの調査が行われる。具体的には、文主題の有無・文末表現の選択と、それらの組み合わせによって形成される構文を観察し、その他の位置に用いられた文との比較により、文のタイプと談話の終結の間にどのような関連があるかを考察し、以下の概念が提起される。

停頓：物理的な動きの叙述や精神的な活動の進行を基調とする談話の流れにおいて、その流れを押し止めたり、ゆるやかにしたりする働き

また、執筆者の意見を表明する「コメント文」におけるモダリティ形式や、事件などの事柄や状態を記述する「非コメント文」における状態性の述語の出現状況から、前者が「語り手の存在の暗示」、後者が「停頓」という側面で談話終結との関連性が見いだされること、および、「停頓」が「語り手の存在の暗示」と同様に談話終結への貢献が弱いタイプの性質であることが示される。

第3章から第5章までは書き言葉のデータの分析であるが、第6章では、話し言葉の分析が試みられ、4コマ漫画のストーリーを語る終結部のデータの分析が行われる。その結果、話し言葉においても、書き言葉と同様に、「収束」「統合」「語り手の存在の暗示」といった「終結性」の諸特徴が観察されるが、書き言葉の談話に見られない話し言葉に特有の概念として以下の概念が提起される。

離脱：語り手が、語りが行われている場から離れ、語りが始まった場へ戻ろうとする働き
語り手は、この種の表現の使用を境に、ストーリーの内容自体を語る立場からストーリーを俯瞰してストーリーについて言及する立場へと移行すること、また、このような「語りが行われる場」と「語りが始まった場」という2つの「場」は話し言葉に特徴的で、書き言葉には見られないものであることが述べられる。

第7章では、談話終結に貢献する15種類の言語形式と「終結性」との対応関係についてまとめ、本論文の研究史上の位置づけと意義および課題が提示される。

審査の要旨

日本語学習者の書いた文章を読むと、まだ先が続くと思わせるような箇所ですら唐突に終わってしまう文章に出会うことがある。文章にはそこで完結していることを明示的あるいは暗示的に示すなんらかの言語表現が存在することが予想されるが、それがどのような表現であり、それぞれの表現にどのような談話終結の機能が担われているのかは、談話終結に関する研究が数多くなされているにもかかわらず、未だに十分に納得のいく議論がなされているとは言い難い。

このような背景のもとに、本論文は、談話終結に関する先行研究で提起された諸概念を丹念に再検討し、本論文が用いる概念の規定を行っている。その1つである「終結性」という概念を、接続表現、文末表現、文のタイプといったさまざまな言語表現に着目したデータ分析を詳細に行うことによって実証的に追求し、終結性に「統合」「収束」「解釈」「語り手の存在の暗示」「停顿」「離脱」という6種類の下位概念が存在することを主張している。本論文の独創性は、これら6種の性質の有無と組み合わせという観点から談話終結に関わる言語表現の特徴を記述し、談話終結に貢献するとされる言語形式に結束性の濃淡があることを明らかにした点にある。このことにより、さまざまな言語形式の中に、終結部に出現しやすいものからそうでないものまでが混在していることの原因が明らかにされ、終結性の性質に関わるそれぞれの言語形式の特徴を明示的に記述することが可能となった。さらに、データを、継時的に展開する談話の流れとして分析し、談話展開のプロセスの中での談話終結の様相を捉えようとする試みがこれまでの研究にない新しい視点であり、「のだ」文の分析に見られる「疑問と解答」構造の分析などでその威力を発揮している。本論文は、以上のように、結束性に6種の下位分類を提唱し、それらの性質の有無を手がかりとして記述を行っている点が、談話終結の研究に新たな理論と方法をもたらしたものとして高く評価できる。

その一方で、第6章の話し言葉における談話終結の分析に関しては、この論文全体の中での位置づけが十分でなく、論説文の書き言葉を主体とする他の部分と整合性がとれていないという問題がある。例えば、「離脱」に関する主張を裏付けるためには、書き言葉でも物語談話のデータ分析を行って検証する必要がある、ジャンルについての包括的な議論を行う必要もある。しかし、この課題は本論文のさらなる発展において解決されるべきものであり、本論文の価値をいささかも損ねるものではない。本論文は「こうして」「このように」「結局」といった接続表現や、「のだ」文と「からだ」文といった文末表現のように、談話終結に関わる類義的な表現の使い分けについても明晰な記述を行っており、日本語の研究のみならず日本語教育にも役立つ知見を提供する優れた論文である。

平成27年1月21日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条(2)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。